

10	稲沢	稲沢市立長岡小学校	キダ	サキコ	イトウ	ユウリ
		稲沢市立下津小学校	氏名	○木田	早希子	伊藤

分科会番号	10	分科会名	家庭科教育
-------	----	------	-------

研究題目

自ら課題を見つけ、日常生活をよりよくしようと考え、工夫する児童の育成
 —主体的・対話的な学習活動の工夫を通して—

研究要項

1 はじめに

学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められており、問題解決的な学習が重視されている。家庭科教育においては、衣食住に関する実践的・体験的な活動を通して、日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し、その課題を解決する力や、家族の一員として生活をよりよくしようと工夫する資質・能力の育成を目指している。

家庭科に関する事前アンケートの結果、児童の実態として、5年生から始まった家庭科への関心はとても高く、家庭科で学んだことを実生活でも生かしたい、様々な料理を作ることができるようになりたい、ボタン付けやゼッケン付けができるようになりたいと考えている児童が多くいることが分かった。しかし、実際に調理や裁縫を生活に取り入れている児童は少なく、また、今の生活に課題を見いだすことができていることが分かった。これらのことから、調理や裁縫に関する正しい知識をもっていないため、自分の生活の中での課題を見いだすことが困難であると考えられる。そこで、家庭科に関する正しい知識を身に付け、自らの生活の中で課題を見つけ、今よりも日常生活をよりよくしようと目指す児童を育成したいと考えた。

本研究では、学習指導要領のキーワードである「主体的・対話的で深い学び」を意識して取り組んでいく。まず、大題材を貫く課題を設定することで、児童が課題意識をもちやすくする。そして、児童が自分の日常生活に目を向け、よりよくする必要性を見いだしながら、自分事として主体的に取り組めるよう工夫していく。また、自分の考えを広げたり深めたりできるよう、対話的な活動を取り入れるようにする。そして、身に付けたことを生かし、家庭でも実践したり生活に取り入れたることができるようにしたい。

2 研究の方法

(1) 目指す児童像

自らの課題を見つけ、日常生活をよりよくしようと考え、工夫しようとする児童

(2) 研究の仮説

学習全体の見通しをもって、主体的・対話的な学習活動を工夫すれば、実感を伴って学習内容を理解し、身近な生活の課題を解決したり、家庭で実践したりする児童が育つであろう。

(3) 研究の手だて

【手だて①】大題材を貫く課題の設定

わくわく感を維持するための課題づくり、導入とまとめの工夫など

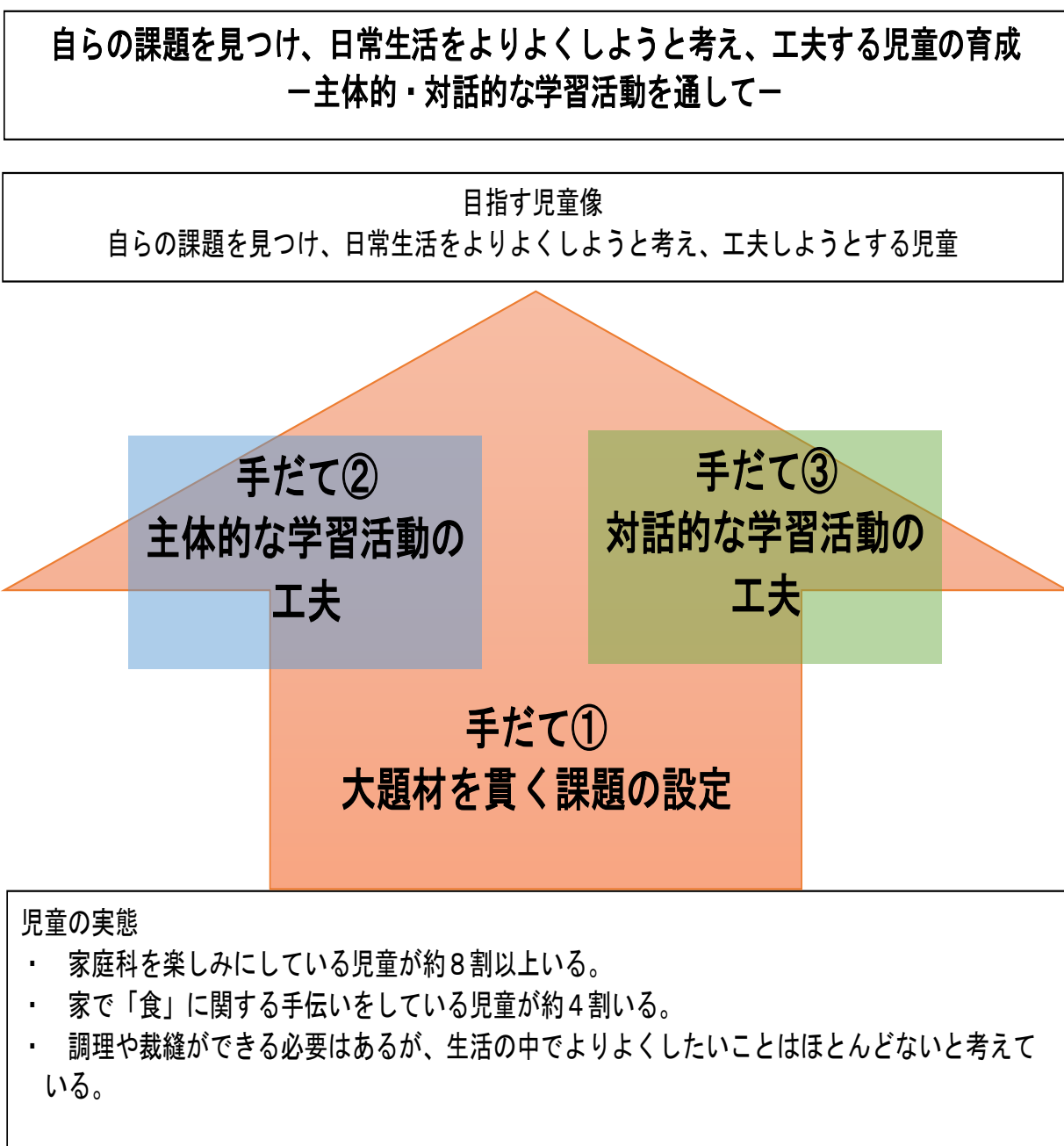
【手だて②】主体的な学習活動の工夫

思考ツール「Wチャート」の活用、学習内容の理解を深める比較実験、タブレットPCの活用、視覚化されたワークシート、意図的な失敗体験、経験を積ませる場の設定など

【手だて③】対話的な学習活動の工夫

色分けした「比べるシート」、家庭実践報告会、共通した実践体験後の共有の場、意見交流など

3 研究構想図



4 研究の実際 第5学年「ゆでる調理でおいしさ発見」全6時間

(1) 題材の指導計画

題材名：ゆでる調理でおいしさ発見								
段階	時	学習活動	目標	手だて				
				①大題材を貫く課題の設定	②主体的な学習活動の工夫	③対話的な学習活動の工夫		
課題発見	1	調理の目的や手順を考えよう	・どんな調理法があるか考え、どのように調理を進めたらよいか考えて、課題を設定する。	・わくわく感を維持するための課題作り	・思考ツール「Wチャート」の活用 ・「おいしくゆでる調理の仕方を探ろう」という課題設定	・「Wチャート」を活用したグループでの意見交換		
大題材を貫く課題：カレーライスにトッピングを！ ～ゆでた食品でさらにおいしく～								
課題解決	2	ゆでる調理をしよう	・青菜とじゃがいものゆでる前後の変化や、ゆで方による違いを実験し、材料に合ったゆで方を考える。		・児童の疑問をもとにした比較実験 ・水/湯からゆでた場合の比較実験 ・切る一ゆでる、ゆでる一切る場合の比較実験	・比較した物を分かりやすくする「比べるシート」		
	3						・実験結果の共有	
	4							・課題設定であがった卵の調理 ・ゆで時間による卵の様子の変化
	5							・実験結果の共有
評価・改善	6	ゆでる調理の計画を立てて実践しよう	・学習した調理のポイントを生かして、ゆでる調理の計画を立てる。	・カレーライスの上のせるトッピングの計画	・「ゆで方レシピ」の作成 ・おいしくゆでるポイントを生かした調理の計画	・「ゆで方レシピ」に対する意見交換		
	家庭実践	野外炊飯（カレーライス作り）の練習をしよう	・学習した調理のポイントを生かして、家庭でゆでる調理を行う。 ・カレー作りに挑戦する。	・自作の「ゆで方レシピ」を参考に調理 ・タブレットPCで記録		・家庭での実践に対する意見交換		
	生活やを変え	野外教育活動の野外炊飯で、カレーライスを作ろう	・仲間と協力して、おいしいカレーライスを作る。		・仲間と協力する野外炊飯	・カレーライス作りを通じた交流		

(2) 授業実践

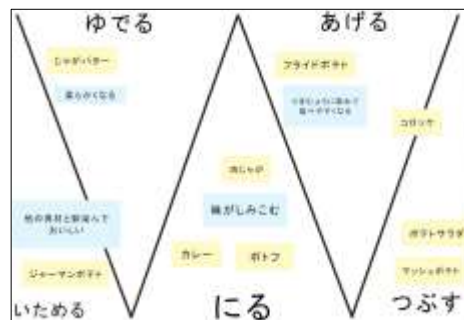
【課題発見】

ア 調理の目的や手順を考えよう（1/6時）

児童が調理に興味をもてるよう、様々なじゃがいもを使った料理を挙げ、どのような調理方法で調理されているかを分類するために、タブレットPCを用いて思考ツール

「Wチャート」にまとめた（手だて②）【資料1】。児童により情報量が異なるため、より多様な意見に気付けるよう話し合い活動を行った（手だて③）。児童はじゃがいもを使った料理を多く知っていたが、その調理方法まで挙げられる児童は少なかった。話し合いを行ったことで、調理方法についての知識が増え、調理することのよさについても、「やわらかくなる」「おいしくなる」「栄養が増える」など多様な意見が挙がった。

おいしくゆでる調理の学習に主体的に取り組めるように、子どもたちと目指す姿を話し合うと、野外教育活動のカレーライス作りが挙げられた。そこで、大題材を貫く課題として「カレーライスにトッピングを！～ゆでた食品でさらにおいしく～」を設定し、ゆでる調理に関する知りたいことや疑問を書き出した（手だて①）。児童からは、「何分くらいゆでればよいのか」「じゃがいもは丸ごとゆでてよいのか」「水のままゆでてよいのか」「ゆでる順番を知りたい」「野菜以外に卵もゆでたい」という意見が出た。また、「カレーライスには3種類の食材をトッピングしたい」「野外教育活動の前に家でもカレーライス作りをやってみよう」と意欲的に考えたり、「トッピングでは、半熟のゆで卵がおいしそう」と工夫しようとしたりする児童の姿も見られた。



【資料1】 児童が作成した「Wチャート」

【課題解決・実践活動】

ア ゆでる調理をしよう（2・3/6時）

児童が書き出した「じゃがいもは丸ごとゆでてよいのか」「水のままゆでてよいのか」という疑問を基に「青菜とじゃがいものゆで方の比較実験」を行った（手だて②）。

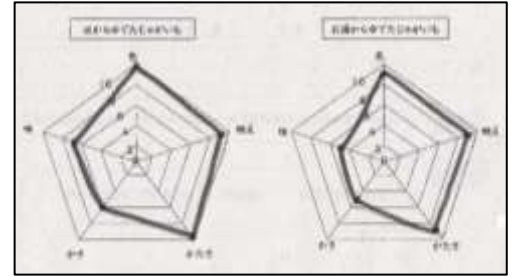
「青菜とじゃがいものゆで方の比較実験」では、水からゆで始めたもの／お湯からゆで始めたものの比較、切ってからゆでたもの／そのままゆでてから切ったものの比較の2種類の比較実験を、児童自身がより疑問に思った方を選択してグループを構成し、取り組ませた【資料2】。児童は、それぞれの方法でゆでた青菜やじゃがいもを試食し、ワークシートに得点化して記入した【資料3】。「青菜は、先に切ってしまうと調理しにくかった」「青菜は、水からゆでるとやわらかくなりすぎる」「じゃがいもは、切ってからゆでた方が火が早く通るし、やわらかくておいしかった」といった、味の違いや調理のしやすさに気付いた。また、比較を行う際には「比べるシート」を使い、比較の条件や対象物を見やすくした（手だて③）【資料4】。「切ってゆでたじゃがいもと、丸ごとゆでたじゃがいもの断面の色が違う」など、味以外にも見た目を比較し、友達と交流する姿が見られた。また、比較実験はグループごとに行ったため、自分たちのタブレットPCで撮影した動画や写真を見せ合いながら、同じ実験を行ったグループと結果を共有した（手だて③）。児童は、「やっぱり同じ見た目だ」「自分たちだけではなく、他のグループも同じじゃがいもの様子だ」と写真や動画を見て話していた。比較実験や結果の共有後、青菜やじゃがいも以外の野菜のゆで方について問いかけた。すると「かたい野菜はじゃがいもと同じように、切って水からゆでる」「じゃあ、葉っぱ系の野菜は青菜と一緒にだ」と、他の野菜についても考えることができた。さらに、遠足の際には自分でゆでたじゃがいもをお弁当に入れたり、家族が体調不良になったときにじゃがいもをゆでて食べさせたりする児童が見られた【資料5】。

イ ゆでる調理をしよう（4・5/6時）

「野菜以外に卵もゆでたい」「何分くらいゆでればよいのか」という知りたいことを基に「ゆで卵のゆで時間による卵の様子の変化の比較」を行った（手だて②）【資料6】。ゆで時間は、児童一人一人がゆでたい時間を設定した。ゆで卵を切ったときに友達のゆで卵の断面の様子と比べ、結果を共有した（手だて③）。児童は「卵のかたさがぜんぜん違う」「黄身の色も違う」「柔らかすぎると殻がむきにくい」と驚いた様子であった。ゆで時間によってゆで卵の様子が大きく異なることを知り、振



【資料2】じゃがいもの比較実験



【資料3】試食を得点化したワークシート



【資料4】比べるシート



【資料5】児童が作った弁当



【資料6】卵のゆで時間の計測

り返りでは「私は半熟が好きなので、これからゆで卵を作るときは8分ゆでたい」と意欲的な記述が多く見られた。また、ゆで時間が短すぎたと感じた児童は、「次はもう少し長くゆでるようにしたい。7分くらいがちょうどよさそう」というように、友達のゆで卵の様子から、改善策を見いだして課題を解決しようとする姿が見られた。

【評価・改善】

ア ゆでる調理の計画を立てて実践しよう（6/6時）

2つの比較実験で分かったことを基に、オリジナルの「ゆで方レシピ」を作成した。比較実験を行ったときに、児童自身がタブレットPCで撮影した写真や動画を入れて、青菜やじゃがいも、比較実験の結果から導いた他の野菜、卵のゆで方についてプレゼンテーションソフトを使ってまとめた（手だて②）【資料7】。できあがった「ゆで方レシピ」を友達と見せ合い（手だて③）、ゆで方を振り返ることができた。また、カレーライスのトッピングを考える際の参考にした（手だて①）、「家でゆでるときも、このレシピがあればおいしくゆでる方法が分かるね」とアドバイスをしたりする姿が見られた。



【資料7】 児童が作成したゆで方レシピ

イ 野外炊飯（カレーライス作り）の練習をしよう（家庭実践）

学習したおいしくゆでる方法を生かし、さらにゆでる調理の実践ができるよう、夏休みに家庭実践を行った（手だて①）。比較実験で扱った青菜やじゃがいも、ゆで卵に加え、ブロッコリーやウインナーなど様々な食品を、おいしくゆでる方法を考えて調理し、トッピングしていた。また、家庭実践の報告会を行った（手だて③）。友達の家庭実践について知り、「それなら自分にもできそう」と意欲的な発言をする児童もいた。

5 研究の成果

事前、事後アンケートの結果を比較した【資料8】。「調理ができる必要がある」「調理ができる」「調理の手順が分かる」項目に「はい」と答えた児童が増えたことから、実感を伴って学習内容を理解できたと考えられる。その結果、「調理を自分の生活に取り入れている」児童も増えたと考えられる。また、「食に関して、生活の中でよりよくしたいことがある」項目に「はい」と答えた児童が増えたことから、身近な生活の課題を解決しようとするできるようになったと考えられる。具体的には「苦手なものをおいしくする」などがあがった。さらに、「実際に食に関するお手伝いをやっている」項目に「はい」と答えた児童が増えたことから、家庭で実践する児童が増えたと考えられる。

アンケート項目	事前 (%)	事後 (%)
調理ができる必要がある	82	94
調理ができる	35	50
調理の手順が分かる	29	38
調理を自分の生活に取り入れている	24	31
「食」に関して、生活の中でよりよくしたいことがある	24	44
実際に「食」に関するお手伝いをやっている	29	31

【資料8】 事前、事後アンケートの結果

(1) 大題材を貫く課題の設定

ゆでる調理の実践では、「カレーライスにトッピングを！～ゆでた食品でさらにおいしく～」という、野外教育活動の野外炊飯で行うカレーライス作りと関連させて課題を設定したことで、題材を通して「おいしくなるようにゆでたい！」という目的をもち、ワクワク感を維持しながら学習を進めることができた。また、家庭実践では児童自身がゆでたい食材を扱うことで、比較実験で得た知識を生かして調理する経験ができ、身近な生活の課題を解決することにもつながった。

(2) 主体的な学習活動の工夫

ゆでる調理の実践では、児童自身が知りたいと思ったゆで方の比較実験を行ったことで、おいしくゆでるためにはそれぞれの食材にあったゆで方があることを、実感を伴って理解することができた。また、ゆで時間の比較実験を行ったことで、ゆで時間によってゆで卵の様子が異なることを実感し、自分好みのゆで時間を見つけることができた。ゆでる調理は、食材を簡単においしくできることに気付き、家庭実践への意欲につながることができた。

(3) 対話的な学習活動の工夫

ゆでる調理の実践では、「比べるシート」を使ったことで、実験結果の共有がしやすくなり、結果を共有する話し合いが活発になった。児童一人一人が作成した「Wチャート」を用いて、調理の目的を考えることで、自分と友達の意見を比較しやすくなり、より多様な意見に気付くことができた。また、家庭実践の報告会により、自分一人でもできそうな実践に気付くことができ、さらに家庭で実践しよう、日常生活をよりよくしようとする児童の育成につながることができた。

タブレットPCの効果的な活用として、比較実験の過程や結果、家庭実践での完成品を写真や動画で記録することで、話し合いの参考資料にもなり、学習内容の理解を深めたり、課題解決にもつなげたりすることができた。

6 今後の課題

限られた時間の中で児童が道具を正しく使う技能を身に付ける必要があった。5年生の発達段階では、まだ日常生活の中での調理や裁縫の経験は乏しく、個人差も大きかった。今後も個人差があることを考慮し、より自分事として主体的に取り組むことができる手だてを追究していきたい。

よりよい日常生活を目指していくためには、児童が自分の日常生活に目を向け、よりよくしようという必要性を見いださなければならない。そこで、始まったばかりの家庭科に対する児童の興味を維持しながら、ワクワク感をもたせ、身に付けたことを生かすことのできる学習活動を今後も工夫していきたい。